

山川登美子の歌(5)ー『おもかげ草紙』 『花ちり塚』全訳ー

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-03-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 越野, 格
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3068

山川登美子の歌(5) - 『おもかげ草紙』 『花のちり塚』全訳

越(*)

野

格

ちり塚』の収録歌、39~76が対象である。続ける。今回は、『おもかげ草紙』の収録歌34~38、そして『花の前稿に引き続き、山川登美子の全歌の通釈をめざして現代語訳を

は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。 は訳文に苦慮し、とりあえずの仮訳も多い。

訳を心掛け、六十字以内に収めるよう苦心した。六十字以内とは、今回も、意訳にしても逐語訳にしても、出来るだけ簡潔な現代語

6・1)に拠る。が、原歌は明示せず、現代語訳のみを記した。でもあった。通し番号は『山川登美子全集上巻』(文泉堂出版、平レイアウトの体裁上、訳文を二行に収める、との物理的な理由から

全集に拠ると、『おもかげ草紙』には「友と我れと折にふれ物に全集に拠ると、『おもかげ草紙』には「友と我れと折にふれ物にとは増田雅子である。本来は「我れ」と「友のかへしに」、「友より始めて 此ぬしとみ子」、との序がある。「我れ」は登美子、「友」がめて 此ぬしとみ子」、との序がある。「我れ」は登美子、「友」がのでいるが、今回は登美子の歌のみを現代語訳した。

その筆蹟も前後ほぼ揃っているので、『恋衣』を発刊する少し以前件、(明治三十七年十月頃)当時のものにまで及んでおり、さらにた歌が「新声」「文庫」時代の初期のものから、いわゆる、恋衣事まれた時期、ないし清書の時期は必ずしも明白でないが、収録されまれた時期、ないし清書の時期は必ずしも明白でないが、収録され

の時点での自由訳ということで、全歌の訳が終了した時点で改めて 歌もある。 その結果、 の頃かと推定される、とした。既発表の歌もかなり含まれている 字句の異同もあり、改めて新出の歌のつもりで現代語訳した。 ないしは訂正をするつもりである。また原歌にある「詞書_ 字句の異同がなくても前訳とは微妙に違った訳になった しかしその違いについてはいちいち明記しなかった。そ

(1) 『おもかげ草紙

そのままの形で現代語訳の後に付記した。

348 て鳴くのは、けっして許してはなりません。 鶯は谷から谷に移って行きなさい。この花のない里に下りて来

349 花の中で、世を憂しと思う卯の花が盛んに咲く頃には。 貴女の御手を取って一緒に泣きたいものです。月の下で、また

351 350 か。 どうして貴女を忘れるでしょうか。桜、 お待ちください、もう少し。花に小雨では憂鬱ではありません 私たち四つの袖が抱き合う、卯の花を照らすその月夜まで。 山吹、蓮華草など色と

352 は問わでも知れたこと、桜の木の根元にある菫塚です。 落ちて行く、羽に痛手を負った蝶々、その流す涙。落ち行く先

りどりに象嵌された玉の御筥に、貴女への想いを囁きましょう。

354 353 で松虫、鈴虫が鳴く頃、さらに私は衰えていることでしょう。 二月の月の下、散る花のごとく痩せ衰えていくこの私。 高鳴る胸、 沸き上がる血潮に、その高邁なる歌の端書き。貴女 秋の野

> の茅渟での記念の歌は、 虹に託して私にお送りください

355 356 みましょう、めしい、みみしいの私たち二人は んでいらっしゃる神様、その日が来るまでどうぞお待ちください 今日の日を昔の思い出として語り合う三人の者。情愛深く微笑 色づいた靄を紅蓮に組んで積み立てて、二人して庵を作って住

357 はありません。佐保の峰風を受け、 この世は私たちには辛過ぎます。 しかし千島は遠い地の果てで 小笹の舟で旅発ちましょう。

お吐きください。 貴女、もし歌がおありならば、潮の気を吸って、そして一緒に 私は当地で山に夕虹がかかるのを待ちましょう。

358

(2) 『花のちり塚

360 359 て再び掃き寄せてくださる御方は何処にいらっしゃるのでしょう。 私の歌は、 散った花々を掃き寄せた塵塚に風が吹き荒れています。箒を持 琴柱の張ってない小琴の端切れを、 花の散る夕闇の

中で探り寄るようなものです。

362 蕾は小さく、黒くもなってしまいました。 山柿の梢にうすく霜が置くのが見えて、秋の暮れ方の風の何と 春は一体何処にいるのでしょうか。鶯は病んでしまい、

紅梅の

361

363 げて、この侘びしい風景を見ている人もいるでしょうか 遠くの山々の木立の間から疎らに雪が見えます。 御簾を巻き上

寒いことでしょうか。

364 芭蕉の葉に淋しい音をたてて時雨が降り始めました。その時雨

- の中に、むせび泣くような虫の声がします。
- す。その暗闇の中に紫陽花が浮かび上がりました。 蝙蝠が飛び交う軒々が黄昏れて行き、夕月が白く空に掛かりま
- 月光の下で鳴く時鳥の鳴き声を。 世を捨てて山に分け入った人が慕うのでしょう、深山を照らす
- てしまったので、私は花の下に仮寝をすることにしました。 郷 幾重にも重なり立った霞の中を辿ってきました。夕暮れになっ
- 窓 腕の立つ絵師ですら描くのが難しいほどの眺めです、山々をか
- 様に打ち寄せられた哀れな貴方を見ようとは思いませんでした。

 ③ 音も立てず儚い浪が絶え間なく打ち寄せる浮世の岸に、私と同
- 夜の木曽の山道を。

 37 私は故郷に思いを寄せる一心で越えてきました、この狼の鳴く
- 花が咲き匂うこの山里の村では。
 ※ 糸を紡ぎながら歌う媼の唄も長閑に聞こえます、霞が棚引き、
- 33 指をさして何を語るのでしょうか、幼い子が手折った小萩を母

親に捧げながら。

- 猟 花を摘んで家路を急ぐ乙女子の、その袖の香りを慕って春の夕
- 35 百合の花を嗅ぐとはなしに嗅いでいつの間にか微睡んでしまい。

任せました、千鳥の鳴く夕方の浜辺で。
心に思うことをただ徒に磯に書いて、打ち寄せる波が消すのに

376

- 37 鳥籠を下枝に掛けて、乙女子が桃の蕾を数えて見るのでした。
- ういて比が失いこのでいて。 38 去年の春、蝶を葬った桃の木の根本に、菫の芽が出てきて、そ
- 39 永遠に覚めないで、と蝶が囁いた、あの花野で見た夢の、うして花が咲いたのでした。
- 議な響きがするのは、一体何なのでしょうか。 貴方、この私の胸に手を当てて見て下さいませ。この胸に不思
- 38 私が何気なく摘んだ草花の名が優美であったので、その花は誰その口紅の色が落ちるほど一杯に。
- 38 筆を折り、歌反古を焼いて、その立ち上る烟に乗って、私は今に贈るつもりなの、と友は微笑んだのでした。
- 34 あなたは見なかったでしょうか、百合の露を吹いていた夕風がすぐにでも飛び去りたいのです。
- 385 どことなく私の弾く琴の調べも掻き乱れています。人に会うの

神の御声を花に伝えていたことを。

も恥ずかしくなる今日この頃です。

- 緒が切れて、何かと物思いに沈みますこの夕べに。 夕顔に置く露の雫を受けて墨を摺り、歌を書きましょう。琴の
- 87 月の照る夜に、姉にも言わないで、明日咲く朝顔の花に歌を結

- まいました、私が病んで伏せっている枕元に。 髪を結って挿しましょう、と言った白薔薇も、残らず散ってし
- に秘め置きましょう。 直接に手に取るには余りにも清い歌なので、絹に包んで私の胸
- 手に導かれて、私は産土の宮にお参りしたのでした。 郷 神様に奉る初穂を持ち、晴れの赤帯を結んでもらって、母のみ
- 39 お母様の写真を抱いて昨夜も寝ました。楽しいものです、故郷

の夢を見ることは

- に差し上げ、御歌を所望したのでした。別、月光の下、葡萄を一房摘み取りました。それを扇に乗せて貴方
- の気が胸に湧くかと思いまして。 野原に出て、小百合に置く露を吸ってみました、私の涸れた血
- 小鳥が群れ飛び、淡い虹がかかっています。 一刷毛で描いた墨絵のように見える暮れゆく小島。その小島に
- 95 百日百夜の間、聖書を持って山に籠もり、霊妙な歌を得ました。
- % 垣根伝いに萩が咲き、その下を流れる僅かばかりの小川の水。
- しかしそれは沈みもせず浮きもせず、中途で藻に絡まりました。39 受け取ることのできない方からの手紙を海に投げやりました。
- 399 露に濡れた蝶の何と優しいことでしょうか、瓜畑の実にならな活。その中で出来上がった歌を、私は口ずさむのでした。 口笛で子羊を呼んだり、鞭で子羊を追ったりして過ごす牧場生

- いあだ花にさえも一巡りして来ました。
- に秘めていたことを神に祈りました、夕暮れの空を見上げて。空を被っていた雲が切れて、その間を星が流れました。私は心
- い声がしました。何のささやきなのでしょうか。歌を書きましょう、と蓮の葉を折ったところ、藕糸の中に小さ

401

- (住吉の蓮池に歌の子ら相集まりて)
- って合奏し、神様を讃えましょう。 迎 神様から沢山の美しい小琴を頂きました。さあみなでうち集ま
- らず、欲しかった米も買わずに山に帰って来たのでした。郷市人たちの冷たい笑いに堪えきれず、私は持って行った薪も売
- 貴女。そんな貴女に、私は今日悲しみの歌を奉ります。 似 お姿を胸に思い描くばかりで、直接御手をとることもなかった

(市といふ題を得て)

何と美しいことでしょう。 (美といふ題を得たる時)45 指輪を土に投げ捨てて微笑んだ、涙の流れる女の顔。その顔の

(見ぬ友の死を悼みて)

- 48 美しい衣も薔薇の簪も投げ捨てて歌に狂うということは、何とし貴方の袖の蔭を私にお貸しくださいませ。 (友の許へ)世間の風は私の薄肌には寒すぎます。哀れと思うならば、しば
- 40 鋭い鎌で刈られるのも構いません。私は刈られて、貴方の背中

楽しいことではないでしょうか。

0
籍て
7
t
X
7
めてた
V
ŧ
L
J
う

(友の許

方、手折ってお抱きくださいませ、塵となってしまう前に。 弱々しい花が風に吹かれて悩んでいる、とお聞きになったら貴

(友の許へ)

ださったか知る手掛かりがありません。 程の上に白百合の花が一枝載せてありました。しかし何方がく

恋を語り合った、そんな夕べでした。 3 子供たちをみな踊りに出して残った年寄り二人。若かった頃の

45 触れることさえも痛ましいと思っていた百合の花を、わけもなけをしました。貴方の歌を収めた小箱に入れる、その芙蓉の花に。44 花に置いた露の香りが移れとばかりに、私は白芙蓉の花に口づ

われて花も私も顔を赤らめたのでした。 私の手で摘んで髪に挿したひと花でしたが、貴方にその名を問

く手折ってしまった今日の私でした。

むらにその名を私にお問いになるのでした。
ば、これの方は、笑いながらこと

も気になる今日この頃の私になってしまいました。418 妹の簪にしょうと摘んでいた花でしたが、その花のことがとて

420 人の気配に後ろの小簾を振り返ったが誰もいませんでした。私の名です。私はそれを貴方のお襟に秘かにくけたいものです。419 忘れないで、と口に出して言うだけでも優しく聞こえるその草

* ニ F))前旬雪では丁…キっと、阝)欠…三上一日、 こくには耐えきれず裂きました、泣きながら縫っていた衣の切れを。

く所望したのでした。 41 手作りの葡萄酒で貴方を酔わせ、都の歌を是非一曲、と私は強

う。世間の人よ、安らかに眠っている二人を、さあご覧ください。422 微笑みながら、私たちは炎を踏みましょう、征矢も受けましょ

ぽれは、私がこの手で受けましょう。 (友と遊びて)23 月明かりの下、姉が手折る萩の花。その萩の花に置いた露のこ(物に激したるとき)

秋の夕風に乗って響きました。

松の夕風に乗って響きました。

方に褒められてからというものは。 紫色が恥ずかしくなってしまいました、私の袱紗さばきをあの

にサラサラと音を立てて花が散り掛かりました。 薄月夜、薄明かりの中で、貴方と呼びかけた私。その私の被布

432 初めての恋をしている姫君の文箱。その紐の結び目に挿してあてしまいました。私の方こそ泣きたいほどの状況でしたのに。437 貴女の胸の中の花が欲しいばかりに、貴女の話に耳を傾け泣い

42 それは夢でしょうか、いいえ幻です。私は目を閉じて色美しいる白百合の花の何と美しいこと。

靄に巻かれてしまいました。

いている羊は決して檻には返さないつもりです。 秋の暮れに血で濡れた十字架を指さしてはなりません。私が抱

431 手すさびに私が結び合わせておいた、門に立つ糸柳の葉。誰が

六

- 432 したのでしょうか、その上の葉をさらに結んでありました。 あれから三年が経ち、今年も秋が来ました。私は躊躇しながら
- 秘めて置いた貴方からのお歌を水に浸けてみたのでした。
- 433 らに踏みにじることは、心弱い私にはできませんでした。 悲しみにくれて徒に摘んで散らした薔薇の花。しかしそれをさ
- 434 人で花野で泣こうとする心から、そうしたのでした。 付きまとう愛犬も追い払って、私は出掛けました。哀れにも一
- 435 私ゆえに貴方をお泣かせするのをお許しください。弱き女の身 今秋の暮れが落ちていきます。
- 436 まき散らす貴方。貴方はなんと悪戯な方でしょう。 筆を噛みながら歌を作ろうと苦心している私の額に、
- 437 御髪に注ぎましょう。 淡紅の芙蓉の花で露を包むことができたならば、それを女神の
- 438 ゃる歌。それが私の理想の歌です。 人の世の物にあらずと、雲に乗って星の女神が取りにいらっし (理想の詩といふ題
- 439 偽りで濁る私の涙が袖にかかるならば、この袖を断ち切って、

私は決して貴方にお会いしないつもりです。

- 440 やかな流れの中に歌の声があります。 旅の者たちが脚絆を捲いて旅している大和川。その大和川の緩
- 442 441 も雨が降りそうな空に、秋の歌を歌っている、その貴方の歌を。 決して思うまい、見るまい、聞くまい、頼みにするまい。今に 貴女は御覧にならなかったでしょうか、貴女の燃えるような唇

が触れてから、

その白蓮に露が湧き出してきたのを。

(泉なる友の許へ) 花の露を (友の許 453 452 451 450 449 445 444 443 448 447 446 こぼれ敷いている紅梅の庭でのことでした。 風が吹き渡ります。 夕暮れには、琴柱を外しましょう。 の香りがする菫の露を吸っています。 いました。 い、飾りの色糸がみな縺れてしまいました。 あたかもそれは悩んでいるかのように見えます。 貴方、その紅筆で雪の兎に目を点じておやりなさいませ。 を下ろした後の針目の跡が淋しげにみえます。 しも触れてはいないはずなのに。 匂やかに雪洞を被う女官の振袖に伽羅の香りをさせて、 脱ぎかけた私の衣被がそよと音をたてました。所々に花びらが 冬の間、絹手鞠を編んでいましたが、白いままで春が来てしま 温んだ緩やかな流れに袖をつけ、頭は雲に被われている夕陽。 立てかけて置いた琴の緒が低く響きました。貴方の袖の端が少 柔らかな蝶の羽交いを上にして菫が揺らめいています。 紅筆でもって添削に苦慮している、そんなお歌はよそにして、 羽子板や手鞠などをみな母君に隠されてしまいました。肩上げ 歌を結び付けた花に小雨が降り、 紅帷の中の秘やかなささやきに、戸口の星はそっと隠れてしま 寒い風が吹いています。

蝶は曙

口に忍び寄って来ました。 未だ春は寒い。そんな中、 梅の蕾をそっと撫でて、 病む鶯が戸

梅壺を

454 笹を滑り落ちる雪の降る夜、 私は歌を作りかねて転寝し、 風邪

- を引いてしまい、 朝の祈りの時に姉を泣かせてしまいました。
- 455 大変狭い、糸の通らないほど狭い袖口を、花の中よりお出にな お覗きになる悪戯な神様がいらっしゃいます。
- 456 私を睨み付けながら説きました、国に対する恨みごとを。大規
- 457 模な雪崩の前に立って、泣きながら弟は。 雪が五尺も積もる中、可愛がっている馬に鞭を当てて、昔何か
- と私を泣かせた、その弟の歌う唄が響きます。
- 458 髪が抜け落ち、乱れてみすぼらしい前髪に、私は緋鹿子絞りの
- 切れを結びました、春の夕暮れの中で。
- 459 せん、と私は袖を持って被いました、幼い鶯の鳥籠を。 春の雲よ、まだその瞳を未来に対する喜びで輝かしてはなりま
- に、 あの高嶺の花を散らすまで、あなたと私は空で凧が縺れるよう 運命の糸で手繰られる身なのでしょうか。
- 461 連続する雪崩の音がしばし鳴り響きます。その中にただ微かに
- 462 飛び去る鷺の声が聞こえます。 雪に伏す葦の中の傾いた杭。その杭に鶺鴒が止まり、夕日を受

けて雨を呼ぶかのように鳴いています。

- 463 岩に寄り掛かり、袖を強く噛みしめながら、 私は海上にかかる
- 雨上がりの虹の色を数えたのでした。
- 464 のでした、白百合の花の匂いを。 何故なのでしょう、と私は高鳴る胸元を見つめては、また嗅ぐ
- 465 中に消えています。岸からは渡しを呼ぶ人の声が聞こえます。 今乗ってきた彼方は満開の桜の中に、これから向かう先は霞の

- 466 隠れ、花売りの君の吹く笛が、今急調子になって行きます。 私が結んで置いた歌は、あの方の項に触れたでしょうか。 月が
- 467 芭蕉はまだ若々しい。その葉陰を通して丸窓から細い月が差し
- 468 込み、文机の上の桃の花一枝を照らしています。 貴方の肩の雪を払い、獲物の多さを寿いで銃を受け取りました。
- そして、お酒の用意が出来ています、と私は言ったのでした。
- 469 な庵が、靄の中から浮かんで来ました。 人々が朝の祈りをするにはまだ早い時分、梅の木陰に伏す小さ
- 470 地図を広げれば、そこは死に場所として相応しい、広大なとこ
- 471 ろです。若者よ、貴方たちには少し大きすぎるでしょうか。 シベリアでは春風は吹いたでしょうか。私ももはや今年で十六。
- どうぞ、貴方、早くお帰りになって私をお召しくださいませ。
- 472 いました。菫を添えて送るつもりの袂の歌も濡れました。 少し濁った水際に咲く菫を摘みかねて、私は袂を濡らしてしま
- 473 の人の夢を、いっそう清々しいものにする朝風です。 朝月がさす渓に、風が吹き渡りました。梅の木蔭の庵に眠るそ
- 474 傘を傾けて振り返った貴女。満開の花の中、お持ちになった梅
- の一枝をそっと投げ捨てながら。
- 475 でも、春には小さい紅梅の花が、辺り一面見事に咲くでしょう。 この冬、丹精こめて育ててくれた方のお名前は言いますまい。
- 476 の音が寒々しく響き、 雪解けを照らす夕日の中で、私は泣きましょう。馬は飢えて鈴 梅の花も散っています。
- 静かに小さく小鼓を払う狩衣の袖に、散りかかって匂いたつ白

- 梅の花。その花のなんと美しいこと。
- 478 笹舟が紅梅、 白梅の花びらを乗せ、神様に見守られて春の川を

流れていきます

- 479 褄を払って梅の木の根に寄りました。 梅が散っていく、その土の匂いに心惹かれましたので、私は小
- 字も淡い桃色でした。 都より昨晩、絵葉書の花便りが届きました。散らし書きした文
- 481 ている我家の軒端には、梅の花が咲き始めました。 シベリアでは春風は吹いているでしょうか。貴方の影身膳をし
- した。ここに吹く春風はどこまで遠く吹いていくのでしょうか。 貴方なしに私一人で咲かせた花。それを貴方宛の文袋に入れま
- てきました。真っ白い梅の花にも朝日の色が射し添えています。 神の支配する闇の世界が明け、また人々の明るい朝の声が戻っ
- 484 みはどうしたらよいものでしょうか。 鶯はその若々しい瞳で花を愛でている様子。さて、この私の悩
- 485 えた桜もちらちらと夕暮れの風に散っています。 ああ、 貴方の御霊はどこにいらっしゃるのでしょうか。移し植
- 486 の瞳に映る夢よ、もう少し続いておくれ 日の御座を包むように、八つの入り江は紫に輝いています。私
- 487 しゃったのでしょうか、春の子をお連れになって。 この里に私をただ一人泣かせたままにして、神様は何処へいら
- しても私の行く手は、なお雲です。遠い雲の彼方です。 杖は折れてしまいました。帚木も消えてしまいました。それに

- 490 489 息がはずみます。この麦笛は一体何処まで響くのでしょうか。 人は待つまい、頼みとするまい、と決心したものの、辺りは暗 麦を引き抜いて作った笛。その恨み泣くような響き、吹く私の
- 491 く雲は低くたれ籠めたのに、私はあの方を待ち続けたのでした。 行く手は遠く険しく、こんなにも必死に辿っているのに、どう
- して人は私を指さして笑うのでしょうか。
- 493 492 でも夕陽が消えたこの春の夕べはまたなんと寒いのでしょうか。 思い捨てましょう、脱ぎ捨ててしまったあの濃紫の袂のことは 新潮に玉藻が打ち寄せて鳴る音。その美しい音を誰が知るでし
- 494 さないでおくれ。 ょうか。紅を付け初めたその日から、浦の乙女が知るのですよ。 私は人の世の情けに堕ちてしまいました。風よ、私に吹き下ろ 遠くの山には未だ雪が残っているのです。
- 495 なことを言い訳に、それなら二人でこの衣を被りましょう。 雲は赤く染まっています。花も風に乱れて散っています。そん
- 496 村一体がその噂で騒がしくなりました。 貴女は十四。早くも畑打ちの唄声が余りにも美しいので、この
- 497 で何とお答えしたら良いのでしょうか。 父の血を受け継いだこの私。お父様から守刀を頂き、その御前
- 498 この兎の首輪、紅いリボンは。 ただ単にその日のことを思い出すだけの品物ではありません、
- 499 添えてみたい、それが私の願いです。 女神の冠を飾る白百合の花。せめてその一片として美しい色を
- 500 この私はただ歌を詠むだけしかできない子です。この私はただ

恋に盲目で、技巧など弄せない子なのです。

- 501 もう半尺ばかりに大きくなってしまいました。 菫が咲きました。タンポポも咲きました。お兄さま、ツクシは
- 502 くこの方。掟の前で叫んでいるこの方。 何重にも巻かれた戒めの荒縄、それらを隠し被われて曳かれゆ
- 503 羽にかけました。 何となく悲しくなって、私は折角摘んだ花を握り散らして蝶の
- 504 夕陽は雲に遮られ、鳩は依然として眠ったままです。 地に私の影が写り、空には愁いを帯びた雲が浮かんでいます。
- 505 りました。高師の浜で見た夢の何と多かったことでしょうか。 松が多くありました。沢山の思い出がありました。貝も多くあ
- 506 ょうか。それにしても恋しく、その時のことが懐かしいのです。 今はただ貴方ゆえに私は生きている、とお思いにならないでし
- 507 います。ほんとうにこの頃の罪のない私ですこと。 私の播いた餌を睦まじくついばむ鳩を見て、歌を作ろうとして
- 508 いことになってしまいました。 殊更に紅ひもを選んで足に結んでやった鳩が、この夕べ帰らな
- 509 ただ一心に私はあの方をお待ちしようとしています。 あの時のことを思い出して、思い返して、鏡に映る我身を見て、
- 510 日々はと、誰がまたそれらを呼び覚まそうとするのでしょうか。 明日の夢は、所詮夢として捨て去れるのに、去年のあの
- 映す、そんな手すさびをしてどうなるものでしょうか。 人に知られないように涙をぬぐい、紅をさして曇る鏡に我身を

そんな私に後毛が痛くなるほど強く夕暮れの風が吹き付けます。 人目を気にして、さようならと、御手を取ることもできない私。

512

(人のかど出のときに)

- 513 どんな世界でも又尽きる時が来ます。そんな無情の地の私に、
- 514 誰が陽炎のような夢を問い寄ろうとするのでしょうか。 貴女に送るはずの花をそっくり小兎の首輪に飾らせながら、こ

の花で飾る貴女の襟元を思い描いております。

- 515 萩が咲きました、朝顔も咲きました。兄君よ、百合は文箱に添
- えて飾るのに相応しいほどの大きさになりました。
- 516 なるのでしょうか、私の時代や人々の世界を。 白虹がかかる千丈もの天空を手繰り寄せて来て、 誰がお治めに
- 517 はないのに、いつしか人の運命を決めるものとなってしまいます。 そうだ、というその判断は、神の判断のごとく絶対的なもので
- 518 さし、小萩を折る乙女子の袖に秋風が吹き寄せます。 母のことは何も知りません、父は百里の遠くにいます、と指を
- 519 寒風が吹き寄せ、空しく琴の空鳴りがしています。 琴の弦が切れ置かれ、何方もいらっしゃいません。 ただ御簾に
- 521 520 わりを静かに待ちましょう。 枯れ果てて落ちた松葉は最後の一葉。このように、 袖を噛んで、萩の葉が枯れる季節に別れてきました。この寒風 物に激したる時 私も命の終
- 522 んで見えました、この守り刀越しに。 胸に押し当て、そして拝んで透かして見れば、遠くの月が黒ず

に打たれて私はいつまで泣き続けるのでしょうか。

- 523 籠の中で飼っていた鈴虫を萩の花に放ちました。 しきりに出る涙を人に知られるのをはばかり、 私は
- 524 が取るに足らない私にもかかりましたので。(萩の舎先生の許に) 奉ります、過ぎ行く秋を恨みに思う名無し草を。萩の葉末の露 (お亡くなりになった先生に捧げます、 私の拙い歌を。先生のご
- 525 講筵の末席を汚しました私ですので。) 逃れ入った御袖の蔭で、秋風のこと、去年の夢のことなど、沢
- 526 を求めて秋風の前に立ちました。 山のお話を私にお聞かせくださいませ こうして人は世間を恨んだものでしょうか。私は髪を乱し、鋏 (物に激して) (同じく)
- 527 い秋風はどこの野にも吹くはずのものですから。 何かと過ちの多かった十年を決して悔いてはなりません、冷た
- 528 絵絹にどうさを引いていて乱れたのです。 哀れにもこの世の恋に悩んで私の髪が乱れたのではありません。
- 529 穏ではいらっしゃらないでしょう。 何をするにつけ、親は恋しいものです。親はまた子供ゆえに平
- 530 目ぶたに吹き当たる秋風。その何と冷たいことでしょう。 とにかくもこの世に生きていよう、と思うその瞬間にも、 私の
- 531 委ねています。 生き延びたこの一年を恨みに思いながら、私は野分の風に身を
- 532 いつまでも吹き止まぬ、 その風には同じ枯れ野に置く露の涙が含まれています。 去年のことを恨んで吹く秋風でしょう

父上、母上のささやきはどのようなことなのでしょうか。私は

533

- この春もまだ肩上げは取るまいと思っていますけれども。
- 534 父上がいらっしゃったら、母上がいらっしゃったら、これほど
- 牛を追う鞭の調子にも漸く慣れて、私は朝夕を送っています。

ある秋

までに私は泣かないものを。

- 535 牧場を渡るそよ風に一層上手に唄が響きます。
- 536 離れた故郷の夢から覚めた秋の夜半。母を頻りに思っています。 子はここにいます。母上はいかがお過ごしかしらと、百二十里
- 537 の舟の上から遠く見上げなかったでしょうか。 欄干に依って雨に濡れていたあの立姿を、流し棹の人よ、鴨川
- 539 く風よ、寒さを吹きかけないでおくれ。 まだ残る札所は二つ。紀三井寺は暮れ、落葉の中に休らう母は

538

時雨が降る中、小刻みに踏む私の足は速く、

袖は重い。

鬢を吹

- 疲れの余り立ち上がることが出来ませんでした
- 540 す月に、私の持つ文箱も恥じらっているようです。 京は暮れて、道を問う私の指にさす紅の色。折から紫野を照ら
- 541 薄に吹くその冷たい風をしばし待っておくれ。 夕闇の中、御堂の笑いが途絶えてしまうのならば、 秋の風よ、
- 542 机を叩こうとしているのでしょうか、山時鳥が鳴いています。 歌を詠もうと言いながらうたた寝をなさっている貴方。その文
- 543 絵の具を溶く貴方、ぜひその水をくださいませ。 鶯が春の水を餌猪口に待っています。

 生憎水が切れましたので、
- 544 人の世の衣というものはなんと肌に痛いものなのでしょうか。 衣を被っても被っても、依然として血は漏れ出ました。ああ

546

545

す杯に帰り花が散っています。 がにほほえむ秋の気配を貴方は許さないでしょうか。取り交わ

な歌であっても、誰か声を合わせて一緒に歌いましょう。

(死なむと思ふ事有蘆花子の不如帰は吾れの自除伝に似たり)も、聞き漏らさせてはなりません、山時鳥よ、その声を。郷 雨を呼ぶのでしょうか、この月の暗さは。でも月の光が暗くて

俗塵も収まり、村は静まりかえっています。 (吉浜に在ける時)50月の下で聞きましょう、磯なれ松の浜辺に打ち寄せる波の音を。

を摘む手に短冊をお持ちの貴方は。50 私に葡萄を含ませて貴方はその味をお尋ねになりました、葡萄

553 伊豆にいる私は磯辺に字を書いて波を待っています、消えていい夢を見ました。 (吉浜にて) 朝晴れの伊豆の島々に波が打ち寄せ合っています。私は昨晩よ

54 伊豆の海に佇む二人の影は、あたかも歌か絵の中のようです。くしかない儚い文字を引き消してゆく、その波を。 (全く)

55 何度試みたでしょうか。半ば波に身体を浸し、私は儚き恋歌を微笑み合う二人に波が静かに寄せています。 (仝く)

波に書くのでした。

全く)

を負うあの子は、わが恋がうまくいかないのを嘆いているのです。556夕暮れ、船縁であの子は何を悩んでいるのでしょうか。海松目

明星の明かりが溶けていきます。 (全く)55 風をはらんで白帆が速く進んでいく伊豆の海。その波間に宵の

げられた片貝を拾う人が誰もいませんので。 55 紅色を溶いて玉藻の上に流したいものです、その浜辺に打ち上

の中で、世を憂しと思う卯の花が盛んに咲く頃には。 貴女の御手をとって私は泣きたいものです、月の下で、また花

うとも。私は貴方のお墓の側に微笑んでいます。 (友への返し) (友への返し)

53 どうしましょう、どうしたらいいのでしょうか。幻にも夢にもら辺りですか。雪の山坂を悩んでいらっしゃらないでしょうか。 死出の山への旅は十万億土の彼方といいますが、今貴方はどこ

(みはかのほとりにて)

現にも恋しい、貴方へのこの気持ちは。

こにいらっしゃるのでしょうか、あの紫の星、にでしょうか。 経 その影が地に映え露に動いていた、思い出の貴方。貴方は今ど

なにほどのものでしょう、神よ、その御手の斧をお振いください。今ここに至っては世間なく神なく仏もありません。私の運命は

- 何百日も私の胸を御墓に貸して温めて上げようものを。 温めて御霊が帰るものならば、霜の置く寒冷の夜に、何十日も
- 草で結び、短い髪の一春を送っています。 黒髪はふくよかに櫛で結い上げたいものです。髪を切った今は
- 方のお車をただ懐かしく眺めています。 特つのでもなく、待たぬのでもなく、夕方の戸口で私は、他の
- 58 御總麻もありません。貴方に後れて病んで漸く癒えた今、私は

墓守をしています。生き残った私の影さえも憎くなりました。

- にお会いしたい気持ちで一杯です。 1かし私の心は貴方 1を掘る鶴嘴は思いのほか軽かったです。しかし私の心は貴方
- √、琴爪の小箱を御手づからくださるとのことですが。

 ☆ お召しになったのは何の御用なのでしょうか。花の夕闇で薄暗
- 中なのでしょうか。髪を解き捌き、風に向かって進みましょう。窈 私は狂ってしまったのでしょうか。この世は何と恨めしい世の
- 34 燃えて燃えて擦れて消えて闇に入ってしまう夕映え。その夕映
- (友の許へ)

- 受け取りくださいませ、神々さま。

 一学を屠り、贄牲の血潮が迸りました。穢し奉ります、どうぞお
- ります。
 の涙を弄ぶ呪詛の神に、私は征矢を射かけ奉
- 栄えは神の御手よりもたらされることでしょう。
 った。その後の

(友の賀におくる)

- 花の咲く限りを漂っています。 窓 まだ覚めやらない私の夢は、霞となって野を越え山を越えて、た。人目が気に掛かる、貴方から差し掛けられた春雨の中の傘を。 さすがに私は袖を振り払ってお断りする勇気がありませんでし
- ※ 宴が果てて私は袂を取られました。すぐに私はその酔顔を払う
- 有り余る恨みを千嶋で泣こう、という堅い決心に。 歩し前に不意に浮かんだ思いが、次第に堅い決心になりました。
- 神様がお酔いになって御心を奪われた京の人形なのでしょうか。 人形の左手に持つ鑿、そこから発する香りが嬉しいものです。
- を操作する運命の神の仕業でしょうか、操りの糸が見えます。 88 乱麻を絶つその顔に、おごり昂ぶる春の狂気があります。人間

菫を踏んだ美しい神の御靴に、罪の花笠を被った、その舞いは。総詩的な舞いでしょうか、それとも思い上がりの狂気でしょうか。

58 生き返った七日の朝、その菫色の空の美しいこと。今はもはや、

600

599

神に媚びようとする私ではありません。

す、自らを讃える歌を。 50 たくさんの試練に私は勝ちました。私はたとえ病んでも歌いまか、私には生まれてこの方、幸せを数える指がありませんでした。 50 神の鞭、それを恐れ尊んだゆえか、神に憎まれたせいでしょう

短 牡丹は散り果て、海棠はまだ細い、ある雨の夕暮れ。私は眉筆

を湿しました、鶯の猪口の水で。

気恥ずかしい旅で、私はまだ夫の名を呼び慣れません。 郷 海上七里相模を越えて、湯の香り漂うこの地にやって来ました。

りました。私は一人憂き旅に残され、遠く百里で泣いています。55 帰り住みましょう、梅の咲く大森に。春を待たずに夫は亡くな

には髭は無いのですか。 郷桜の薬に隠れ息を潜めて、御便りを奪おうとする蝶よ、お前

色とりどりに象嵌された玉の御筥に、貴方への恋を囁きましょう。 どうして忘れることが出来ましょうか、桜、山吹、蓮華草など

(友の許へとて)

609

608

ん。私は菫に置いた曙の露を盗みました。 確かに罪深いですが、病気になるほど気に病む罪ではありませ

まいました。それほど恋は人を熱くするということでしょうか。柔らかい御手に許された花の命。その花が私に託され萎れてし

(友より得たる花しほれたり)

その春風が戸張を窺い、綾を揺らしています。 酔った私の罪を、花のせいにするかのように暖かく吹く春の風

は、もぬけの殼の日々を送っていますの、雨や風に御墓の荒れは如何ばかりでしょうか。百里西にいる私

一年にわたる看病の末に得ました連作の数々。恨みごとの歌のしょう。月の引力で汐が引いて、天に至る道もあるでしょうから。御霊が星に去ったのであるならば、私は大森の沖の汐となりま

多い中で、喜びで輝いているのはどんな歌でしょうか。

607 地上に一人残されました。泉は涸れ花も枯れて荒れすさぶ園生は、大地軸に半球がかかっているほど大きく残っているのです。 空にかかっている虹すら小さいものです。貴方を想う私の恋心

に、何を守って私は生きていったらいいのでしょうか。

のことで無いようです、昨年はあれほど泣いた私ですのに。

泣いている私を、七千百里彼方の波の上に置いて見ると、

我身

した。輝き残った私は、なお蝶となったままで蜜を吸っています。蜜に熱中すると、牡丹の花には熱がさめて意識が薄れていきま

- いました。熊野の能衣装を脱ぎ捨て、飾らぬ姿で歩いた御室は。がました。熊野の能衣装を脱ぎ捨て、飾らぬ姿で歩いた御室は。
- 掬の水を飲みました、座禅を終えて膝を立てたその時に。 11 今日は七日、座禅をした梅の香の匂う夜は明けました。私は
- りません。朝の祈りの時に梨の花が散りました。 (2) マリア様の御裾にすがりましょう。どう治療していいのか分か
- 歩き。私の恋もこのようでした。世間の評判もこのようでした。 留 解き放った髪が肩に冷たく、梨の花も冷たく降りかかる夜の出
- す、この春の寒の戻りの寒いこと。64 紫の細打紐に、世にある限りの温かい光を盗られたかのようで
- 女が二十を過ぎたならば、その虹を仰ぎ見るべきです。 むかし、小さい身丈で仰ぐには、余りに虹は遠くにあります。しかし、
- よ、相手に賢き名の評判をとらせてはなりません。 616 同じ旅をする道連れに、たとえ道の片方は譲ったとしても、女
- 618 撲たれてもその痛さは我慢出来ましょう。しかしどうして諳んて、悟りは難しい。雪の降る千島こそ私の歌には相応しい所です。617 小督仏にすがり仏門に入ったとしても、その境地は京の雲の果
- 619 日が暮れて寒々しい竈を前にして泣いたとしても、幸せを求めずることが出来ましょうか、我が師も泣いた女大学の文字を。
- 20 世に三人いるという聖人、その聖地を訪ねて何を賞賛しましょ続けましょう。今の世で涙に暮れない女なんかいるものですか。
- © 子羊の皮を被った狼が牧場に安閑と暮らし、やはり聖人の笞を

荒れた牧場に子羊の肩が震えています。

- 逃れている状況。それがこの世の実情なのです。
- とばかり、着物の袖は女には長いのです。
 級々の思い出を恨みにして私は死にましょう。鞭の傷跡を隠せ
- の衣が這う白百合の花の運命を。(それが御心ならば、乙女の運命をここでお伺いしましょう。蛇

623

- その裏の心中を尋ね見てください、そして日の下で表の心を。似一神の姿も悪魔の姿も一人の女の中に現れるものです。闇の中で
- 金の轍を遺して雲が走り行きました。女は弱いものです、との声が不意に厳かに響きます。そして黄

- が這います、白百合の表紙に。 歌を憎んでいた、去年の私の日記を先ず手始めとして、蛇の衣
- 9 ハンギー・エア・ウナッスの言葉ったの言葉は、この別できょう。私の名は傷つきません。しかし漲る胸のそれは夜な夜な呻きます。20 人の道だからと、不平不満に思いながらも何事も包み隠せば、
- 命を食い殺す虫なのです。

 ② 私に考えを押しつける人の言葉や世の慣習は、私の胸を焼き、
- 太陽も知らず土を掘る土竜のように、私は生きるだけです。 世間が下々の私にどのように強いても構いはしません。暖かい
- 苺が高々と繁茂しています。 弱き子の私は天を指す指も毒に病んで震えています。地には蛇

833 闇を抜け出た此処こそは、夜のない芸術の国です。今日私は先

ず脱ぎます、六塵の衣を。

- 633 身を屈めて縋り、裂けようとする胸から出た笑みなど軽々しい
- 窓 露の置くのを待つこともなく、月の出を見ることもない宵時のものです。答に泣き叫ぶ子、それが女大学の国に住む女です。
- 63 写真の二人は、同じ恨みを懐いている同胞同士でしょうか。二露草。その草の名に値しないまま、ただ散れというのでしょうか。
- 仕事にかかる、そんな秋の日を送っている、とお思いください。 先ず百合に若き乳房の貴女の姿を求め、そして私は襷を掛けて

人同じく、春にやつれ、秋にやつれています。

(友の許へ)

窓 兄に所縁の軒端に咲く忍ぶ草に、秋の訪れの露が置いています。

私も兄を想って袖を濡らしています。

(兄上追懐)

- くコオロギの声のなんと悲しいことでしょう。 (兄上追懐) 郷り返し尽きぬ兄上の思い出を綴りたいものです。夜中にすだ
- の葉陰は泣くにも忍ぶにもよき処です。 組 雲に現れる秋の愁い、その愁いを深くこめている芭蕉の葉。そ
- を全身に飾られたその御姿は、花の化身のようです。
 迎、頸に胸に腕に耳に、簪として、裾飾りとして。黄菊や白菊の花々
- さい、悪魔にも絡みつく私の黒髪を。
 望戦の船の帆綱に錨綱に、どうかこの千筋の黒髪をお召しくだ
- 4 飢えて今は血も流れませんので、書くものにも力がありません。

- 人よ、私に魔という文字を教えてください。
- ん。こんな夜は鴉が鳴いて黄泉に帰るのでしょうか。 お鏡が霜の寒さに割れてしまいました。しかし木霊はありませ
- るようなもの。それに似ているのがこの人です。
 66 保ち続けられない才能、それは旨酒が罅の入った甕に入ってい
- 64 真っ白の羽の鳥に含ませた、花一枝。どうか、武蔵の彼方十里ですから、目を塞いで知らん顔しましょう、尺に余る緋牡丹にはਿ64 窶れはしませんでした。しかし春を呪うのが当然の私の髪なの
- 64 髪を撫でて鏡を覗きたい夜もありました。夢の中で摘みましょにお住まいになる貴女の許に落ちますように。
- 50 聖壇に祀ったこのうら若き贄牲を御覧ください。しばし蝋燭のうか、簪にするその白花を。
- 灯りを百にも増しましょう。
- きて、夢の中で貴女とお会いしました。 幸せは今靄の中に浮かび上がりました。夢はまた静かに降りて
- 窓 天にいらっしゃれば未だ花なるご年齢の貴女、土の卸座なども自身の思い出を乗せて、先ず出発してください、紅蓮の小舟で。総 此世のことは心配せず、嬉しいこと、悲しいこと、様々な貴女
- 緋桃、緋椿で飾られています。 謎® 天にいらっしゃれば未だ花なるご年齢の貴女、土の御座なども
- 進みました。いたいけな姿の姪を抱いた母が来ました。

 雖®
 ・
 はの者を低くきしらせ、姉の棺を乗せた御車が後先を守られながら
- 骨を拾い集め、残された六人は花をもって飾ったのでした。一番大切なのはこの御骨でしたか、などと話しながら姉上のお

- た姉上が、五月も経たない中に、この有様になってしまいました。666 兄上がお亡くなりになりました、と泣いて駆けていらっしゃっ
- 闇の中に藻の花が咲き、そこを流れていく私の袂、私の身体。 これは私を躓かす道のうねりでしょうか。さらに夢は続きます。
- ってしまいました、あの五月雨の頃は。
 一のののののので、病みさらばえて腑抜けのあまり、あるか無きかにな
- は舞いなさいます。 幾万の、尺に余る緋牡丹を敷きつめ、聖戦の勝利を祝って将軍
- 山風が一層の興を広げました。 一杯の御酒にも酔ってしまった勝ち戦さ。長白山を吹き下ろす
- 御名が大き過ぎたので、その地に入ることができなかったとは。68 勝ち戦さ、日本の将軍が敵の城を占領したのに、余りにもその
- びこ3 持っここのこ気をご、大いこでの。 64 血も凍るほど冷たい鴨緑江の水でお洗いなさいませ、片身離さ
- ずにお持ちになった絵筆を、歌いながら。

天が音を立てて揺らぎました。しかしおひと方が揃わなかった

- 66 男神と女神との、ほんのしばしのおひろいでしょうか。森の泉戦さ神。旅順港再閉塞の朝の出来事でした。
- 66 春の真昼、崩れ落ちる牡丹に夢は埋もれてしまい、私は意識がに靄が立ち舞いました。

- 遠くなり、感覚を失ってしまいました。
- でございます、とひたすらに私は申し上げているのですが。 白牡丹、緋牡丹、褄濃ぼかしの女御さまのお袖。今が花の盛り
- に百合の花が香る中、私は召されてお前に立ちました。
 弱たかも靄の上に立っているかのような踏み心地です。瑠璃盤
- ですっかり興ざめて過ぎ行く春は、人々に別れを告げました。しき起こした驕りの塵を掃くかのように、五月雨が降っています。で春は過ぎ行きました。孔雀も綾羽を萎めました。孔雀の羽が巻
- かし、青葉には飛び行きませんでした、蜜蜂の群れは。
- き抜けていきます。
 舒 私の思い出が砕けて散って渦巻いて、青野千里を風となって吹
- いるかのように見えました。
 び、華やかに輝きを放っている夜の境内の牡丹。牡の狛犬が笑って
- 達の御袖はみな藤色で、夕日に映えています。 影を長く引いた供奉の御車は母衣を上げました。乗っている公
- は。五月雨は人を老いさせる、と時鳥は鳴いています。
 一青葉を裂き、露を散らすような泣き声ですよ、時鳥、お前の声

- や急激に老いてしまったようです。 静かに語って去っていった幻。しかしその幻は、靄に入るや否
- たような気がしますが、寂しさ、と言った方が適切でしょうか。 郷 肌寒い夏です。芙蓉のような月に夏が泣いています。私も痩せ
- 88 強い浜風にも海水を焼く熱い砂にも身体をお厭いなさいませ。
- 明日から千葉の浜に住む、歌を守る女神の貴女よ。
- (しら梅の君を千葉の海におくるとき) -次の歌にもかけて-
- ださい。それが夕虹となって山にかかるのを私は待ちましょう。総一お歌ができましたなら、汐の気を吸って歌と共に吹き出してく
- 香っています。 (しら桃の君におくる) 都鳥よ、文使いの仕事にお励みなさい。墨田川の堤には夕靄が

683

- 告する姉の立場に立つことが多くなりました。 袖の隙間を留めてしみじみと聞く秋風の音。私も何かと人に忠
- で巣ごもりをする、ある春雨の降る夕方のことでした。
 のよりでした。
 のようでした。
- 88 春の海、潮干狩りの貴方と私。とにかくも互いの袂と袂とが恋

をする一日となりました。

88 小船の灯りが水面に反射し、川岸の柳に映っています。折から

の雨が小船に恋を運んでいるのでした。

- 88 あたかも黒髪が濡れて心細い様子に見える月見草。世を恨んで
- っています。私も見倣って恋の歌の勉強をしましょう。 恋を促すように、岩屋の氷室は花々で一杯で、蜂たちが蜜をと

701

- して歌に興味のない人々の声が響いています。 尾花が風に揺れ、目白の秋はうらぶれた様子になりました。そ
- 歯を染め、紅を可愛らしく引いて恥じらうように花を売ってい柳の緑に映える娘の帯の色、そして京都の町の何と美しいこと。雨の日、川沿いの柳の下で木屋町の方を指さす娘が一人、その
- る女。その花売りの声にやはり京訛りがありました。 歯を染め、紅を可愛らしく引いて恥じらうように花を売ってい
- の吹いた夕方、私は虫の音を尋ねに野原に出かけました。 恨みごとをかこつのは、やはり秋のせいかしらと、試みに野分
- 695 葦が高く茂る入り江に夕日が弱々しくさしています。私の秘かれることができました。 具い書で着きたから
- 6% 恋ゆえに何人もの女が沈んでいる琵琶の湖。姫神さまが嫉み住に流す涙も年を重ねました。
- んでいる竹生島のせいかも知れません。
- 九の娘の菅笠が京を落ちて行きました。 歌 恋人に手を引かれての初の旅、若き身の裾は露に濡れます。十
- しました。しかし鐘を突くばかりで痩せ衰えてしまいました。
 録 鐘に逃げ入った、その恋の姿を夢に見て、私は十年を寺で過ご
- 縋りました。桜吹雪が私の震えを止めてくれました。偶然にも魔物が呼び交わす声を聞き、私は戦きの余り桜の木に

699

そんな雨の心も知らないで、海棠はただ雨の中に立っています。⑩ 雨が寂しく降ります。誰かに詫びようとして降るのでしょうか。

木霊よ、また返って来ておくれ。秋は寂しい。私が袖を裂くほ

702 どの苦悶の歌を作っている、と世間はお思いになるでしょうか。 木犀の下に雨の一夜を借りて過ごしました。 絵筆をとる身の私

ですが、そこで自分の至らなさを知りました。

703 そうに違いない、と無理に押さえて胸は鎮めましたが、夜中に

704 疑いの心がまた蘇り、涙は寂しく流れました。 月の照らす神社に、姉と一緒に来ました。夕顔の咲く中、 何も

言わず語らずに、人は別れて行きました。

705 だ日の浅い「乱れ髪」の歌集に。 何時の間に私は胸の揺らぎを覚えたのでしょう、 読み始めてま

706 湯上がりの乳房を拭いていると、御粧殿の御簾が揺れました。

707 庭の露草は紅い種を落としてくれたでしょうか。 磯萩を袖に包んで砂浜を一里歩きました。秘めた恋を懐いてい

る私の歩みに、風は背中を押してくれました。

708 萩は咲いたのに野田は秋の気配がしません。昼寝から覚めまし

たが、

709 人には様々な想いがありますので、秋は木の葉の落ちる音にも

捨て去ったはずの恨みごとがまた襲って来ないでしょうか。

人の涙を誘う響きがあります。太陽が何と黄色いこと。

721

710 に百合に置く露を吸うのでしょうか。 百合の花の中に、私は身を預けて入りました。私も鈴虫のよう

711 鈴虫の声に私の淋しい夢は守られています。 初秋の風が涼しく吹いています。 夕顔が痩せ細って

712 ました。しかしいくら泣いても他に残されている道はありません。 露を吸い、まだ足らぬ思いで薬を噛み、袖口を噛みしめて泣き

> 713 を潜りました。 酸漿の小枝を帯に挟んで笹色に、月灯りの下、私は紅屋の暖簾

714 屋に吹き渡れ、初夏の涼風よ。 赤ん坊の枕蚊帳には、紅縁が燃えるような百合の刺繍模様。 産

715 行進に稲穂も波打つのでした。 今日は六斎日、 囃し浮かれて虫送りをする日です。 若衆揃いの

716 虫たちがすだき、 約束の時間に急いだ昨夜の野道。 今日は月が

明る過ぎるので、目深く手拭いを置きましょう。

717 ちが月を見て遊んでいることでしょう。 憂しとては楽しとては何につけ、夜中じゅう、どれだけの虫た

718 萩の花と別れて川を渡りました。 飛び飛びに撫子の花が咲く一里余りの道の先。薄月の下、 私は

719 霧の中、霧の御声のたゆたいに私は身を任せました。その間は

720 瞬の神の声すら許したくはありませんでした。 貴方が私を待ったのでしょうか、私の方でしょうか。 寄れば互

いに手に手をとって、募る恨みも大空もすっかり晴れていきます。 夕顔に片頬を背けて泣いていらっしゃる貴女。その貴女の額に

星よ降れ。月は仄かに照らしています。

722 遙か遠い星、そこに住む何方に向けてお手紙を書いたらいいの

723 でしょうか。私がこの世に生まれるまでいた古里の星の何方に。 私の髪が長く雲に靡いていく思いがします。私を巡って、入り

日と風とが雲に恋のさや当てをしています。

724 これからも私は、 幾秋にわたってこの想いを繰り返すでしょう。

- 725 します。それは秋の落ち髪、日毎に増えていくのです。 人は皆おなじことだ、と分かっていますのに、私はとても困惑
- 726 雁に実らない恋文が運ばれて行く、そんな秋が。 竹が切られ、 流れゆく水が広がって行きます。秋が来ました。
- 727 貴方に別れを告げ、私は絵筆を持って秋の旅に出ます。この恨
- みを捨てる野辺は何処にあるのでしょうか。
- 728 を彩った、詩の切掛け、恋の始まりでした。 磯は久しぶりです。千鳥、磯鳥、浜茄子。これらは私たち二人
- 729 糸に私は釣るされました。 布切れに瓦を包んで錘にし、人の才能を量る秤。そんな棒秤の
- 730 と答えましょう。たとえ拙い私の歌であるにしても。 この世に生まれてきて、母の膝の上で習得したのが私の歌です、
- 731 なって、 世間が鋳造するというのなら、私も一つの形に、一つの香りに 人間の形をして竈を出ましょう。
- 732 高く身を持して、私は夕焼けの色を袖に染めました。私を嘲っ
- た人たちには塵が飛んでいくようです。
- 734 733 この私への誹り、辱めを この世が続く限り、歌がある限り、私は決して忘れはしません。 現実の地にはありません、歌の中にだけ見る幻のもの。その幻
- 735 筆が誘って私にこう書かせました。でも、それは幻影なのですよ。 が余りにも美しいので、それを恋と呼んでください。 女が一人で生きるには余りに淋しすぎる秋の夜です、と思わず

- 737 736 ましたが、 しません、文字を書く仕事が充足すればそれで私は嬉しいのです。 書を読んで智慧を売る子として私は生まれて来ませんでした、 世に果たすべき務め、そんなことは私は知りませんし、考えも 百舌が鳴く秋の夕暮れと、私はいつものごとくそれを聞いてい 田から吹いてくる風は、呪うように寒いものでした。
- 738
- 蛇の薄衣が価値のあるこの世界には。
- 740 739 いつからその値を定めようとし始めたのでしょうか。 心はほとんど虚ろになってしまった、そんな人の成功の暁をば。 似なくていいのです、習わなくていいのです。成功したものの 読めば私は満足で、満足しても用には立たない空の文字。人は
- 741 包んでいる胸から吐くその息には。 吐く息には雲も動かそうとする思いがあります、 あの方の命を
- 742 伊勢物語の御講義、何を躊躇ってのお声の乱れでしょうか。 先
- 生の白き御髯に、 菊の香りよ、吹き寄せておくれ。
- 743 れ合い、山全体が夕日に輝きました。 互いに触れあっては花々が頷き合う春の日でした。木の葉も擦
- 744 を指さす人々に向かって、 いつの日か、思い出をまた華やかに飾りたいものです。 笑い戯れましょう。 私たち
- 745 しょうか。人の口が毒を吐きます、 これほどまでにむごく私を呪う世の中でしょうか、 風の吹く八衢で。 嫉みからで
- 746 万年後かにご覧ください、この今の世の有様を。 歌を詠んだので罰せられました、と先ず書き残しましょう。 幾
- 747 先生と友と私とが詠んで成った、それで満足の歌集、 そんな歌

- 集にどんな危険があるというのでしょうか
- 748 幸いなことに涙の奥に潜ませていた命は、 強い声で答えたので
- した。歌こそ命です、と。
- 749 人々よ、私を怖がらないでください。雨に幸せを説いている淋
- しげな秋の浪よ。私を舟に導いてください。
- 750 人には恥ずかしいことです。人の話を聞いて貰い泣きした涙よ 私事で思わず流した涙の方が余りにも多くなりましたことが。
- 751 る秋の雨の日。過去の時代が古びてしまい、涙が流れて来ます。 つい先程まですっかり忘れてしまっていた人に手紙を書いてい
- 752 私のこの細い指に、筆を持つ力が余りにもありません。そして
- 風がこの小さな火影を嬲るのです。
- 753 せず、火もて焼かれて。 岩室の中で溶けていくほどに眠りたいものです。夢見ることも
- 754 は、 吹く風に私の涙を含めましよう、二百里の彼方まで。でも母に 送られた小袖を着て暖かくしています、と伝えておくれ。
- 755 黄昏れてしまいました。鐘の音は森を越え、淋しい黄昏を追う
- かのように響いて行きます。
- 756 かな幸せでした。私は小さな我身を顧みてそう思いました もし蜘蛛の糸に引かれたならば、それで十分に足りるほどの微
- 757 むのがその夜の梟なのです。 翼を堅く閉じ、雨に打たれている梟。巣に籠もる小雀が恐れ悩
- ば 千年を経て再び呼び返されるような、そんな評判で死ぬのなら 私は今の世のあらぬ非難も黙って受けましょう。

759 牡を誘って瀬で羽を洗っている鶺鴒。その鶺鴒の飛石に白桃の

花が散っています。

- 760 ち。 ああ今日の、この人々を前にして笑わなければならない捕虜た その胸の中はどんなにか冷え冷えとしたものでしょう。 ^{註®}
- 761 つ雨となったのでしょうか、 うなだれて雨音を聞けば、なんとも淋しい春の夜です。花を打 私が落とす涙は。
- 762 **鶯籠に水差などを揃えて吊した桃の木蔭。そこから私は見たの**
- 763 です、朧に霞んだ遠くの山々を 今日の私は、昨日までに得た名声に欺かれて、 夕宵寒い野辺に
- 寂しく送られました。 まだ寒い春の夜です。私の胸の中に鳥の巣がある心地がして、

- 抱いて暖炉を入れました、 鶯の籠に。
- 765 を頭に頂いた花売りが通ります。 薄い紫の朝霞がかかる葵橋。その橋の上を、 房の襷を掛け、 花
- 766 の音で夜が更けていきました。 朧月がためらいがちに桜を照らしている祇園町。 都踊りの囃し
- 767 らっしゃるあの方を、初めて私に意識させたのでした。 草餅に辻占を添えて売ってくれた大原女。その辻占が高雄にい
- 註 ① 平 19 · 12 域科学部紀要第Ⅰ部人文科学(国語学・国文学・中国学編)』 「山川登美子の歌⑴-『白百合』全釈-」(『福井大学教育地

「山川登美子の歌②―『恋衣』拾遺・『明星』掲載歌―」(福

井大学言語文化学会『国語国文学』第四十八号、平21・3)

掲載歌-」(『福井大学教育地域科学部紀要第Ⅰ部人文科学(国「山川登美子の歌⑶-初期投稿歌、『恋衣』以後の『明星』

語学・国文学・中国学編)』、平21・12)

文化学会『国語国文学』第四十九号、平22・3) 「山川登美子の歌4)-『詠草』三四七首-」(福井大学言語

註② 釈迢空「女流の歌を閉塞したもの」(『短歌研究』、昭26・6)

訳してみた。註③ 原歌は三字分が翻字不能であるが、仮に「たとへ」と補って

のを偲んでの作〉、との注がある。目)が明治三十六年七月二十六日、数え年四十一歳で病死した註④ 全集には〈以上の二首は、登美子の長兄久太郎(山川家八代

の作と思われる〉、との注がある。明治三十七年三月九日、数え年四十歳で病死したのを悲しんで註⑤ 全集には〈以下の四首(ൈ56)は、登美子の長姉河いよが

に従って訳した。
註⑥ 原歌は一字分の翻字が確定しないが、「輿カ」とあり、それ

原歌は一字分が翻字不能であるが、仮に「近」と補って訳し

註 ⑦

註⑧ 原歌の翻字に「笑まんりよ」とあるが、「りよ」を「虜」とてみた。

こて訳してみた。